

花

いま
新潟大学の魅力と現在を発信

新潟大学季刊広報誌 [RIKKA]

2017.SUMMER



NIIGATA UNIVERSITY
MAGAZINE

No. 21

特集

授業紹介 -教育の現場-

学生の課外活動&サークル紹介 Enjoy! 学生ライフ

注目される研究報告

シリーズ 恩師と語らう

活躍する卒業生紹介 “学びの先”

OBOG・教員によるコラム

基金関係のお知らせ

Campus Information

ダブルホームの軌跡

—それぞれの声がつむぐ10年—



真の強さを学ぶ。



新潟大学



Cover Photo

西門から教育学部に抜ける遊歩道。途中曲がれば総合教育研究棟の中庭にベンチや学生の卒業制作による美術品が佇む。自然豊かな新潟大学のキャンパスは、特に5月から8月頃が一層鮮やかに見える。

特集 ダブルホームの軌跡 —それぞれの声がつむぐ10年—

本学がダブルホーム制を導入し今年で10年を迎える。10年に亘り関わってきた、学生はもちろん地域の方、学内関係者など多くの人の“声”から10年を振り返る。

ダブルホーム制とは、学生が自分の所属する学部（ホーム）以外に、教職員と共に地域と連携し、大学の枠を越え、「もうひとつのホーム」で活動する本学独自の取り組み。導入は2007年。今年で10周年を迎えた。本特集ではダブルホーム制の10年間の歩みが、本学の学生と地域、さらには教職員とのどのような変化をもたらしたのかインタビューやアンケートを中心的に迫る。

第二のホームが 学生の人間力を 向上させる

まずは教育・学生支援機構学生支援センターの学生支援部門長である松井賢二教授に、ダブルホーム制の基本方針について聞いた。

「ダブルホーム制スタートの背景には様々な要素がありました。そのひとつに、学生同士の人間関係が希薄になっていることへの懸念がありました。大学の中に居場



ダブルホーム活動演習



教育・学生支援機構
学生支援センター
櫻井典子 特任准教授
教育・学生支援機構
学生支援センター 学生支援部門長
松井賢二 教授

所がない」という声が多く聞かれるようになった。一方で、企業が人材に求めているのはコミュニケーション能力であるということ。必要なのは人間関係の力です。これを学生時代に身に付けて、社会に出ていくても良いと思います。これがダブルホーム制の始発点の目的でした。2007年の当初は、新たな社会的ニーズに対応する学生支援プログラム（学生支援GP）として、

わりました。現在に至る17ホームの大半が確立したのもこの時期です。その際に掲げたテーマは“地域の教育力をいかした学びの場”というものでした。初年次学生向けの導入授業も開講し、現在に至っています。

ダブルホーム制の要は地域との連携だ。学生は実際に各地域で生活している人たちの立場や視点で事柄を捉えるという学びを行う。そ

こで価値観を共有することが学生の居場所を作り、人間関係の力を養うことになる。活動を通して学

生たちは、キャンパス内では得られ

ない多種多様な経験を積んでいる。

その成果について、ダブルホーム制

の居場所を作り、人間関係の力を養うことになる。活動を通して学

生たちは、キャンパス内では得られ

ない多種多様な経験を積んでいる。

その成果について、ダブルホーム制

の居場所を作り、人間関係の力を養うことになる。活動を通して学

生たちは、キャンパス内では得られ

ない多種多様な経験を積んでいる。

その成果について、ダブルホーム制

2017.SUMMER vol.21

CONTENTS

03 特集

ダブルホームの軌跡 —それぞれの声がつむぐ10年—

08 授業紹介 -教育の現場-

09 Enjoy! 学生ライフ

10 注目される研究報告

12 シリーズ 恩師と語らう

13 活躍する卒業生紹介 “学びの先”

14 OBOG・教員によるコラム

15 基金関係のお知らせ

16 Campus Information

公式Facebookページ更新中!



本学ホームページからアクセスしてください。

ホームページで発信するニュースのほか、四季折々のキャンパス内の風景など新潟大学をもっと身近に感じていただけるコンテンツを発信しています。多くの皆さまの「いいね!」をよろしくお願いします。

『六花』とは…

本誌のタイトルでもある『六花』とは、本学の校章のモチーフである“雪の結晶”を表す言葉。本学の校章は、シンボルマークであった学生章をモチーフに本学名誉教授 小磯 稔氏がデザイン化したものです。



題字
野中浩俊(のなか ひろとし)氏
新潟大学名誉教授(教育人間科学部)
専門は、書道、富岡鉄斎研究。
現在は、岐阜女子大学 教授

ダブルホームの軌跡—それぞれの声がつむぐ10年—

ダブルホーム10年の歩み	
2007年度	● 学生支援GP採択、10ホーム(学生93人、教職員32人)でダブルホーム活動開始 ● 専用ホームページの開設
2008年度	● ダブルホーム活動の状況を検証する成果報告会を開催
2009年度	● 地域・学生・教職員で活動を考える第1回ダブルホームシンポジウムを開催(以降、学生の企画・運営で毎年開催)
2010年度	● オープンキャンパスにて高校生に活動を紹介する「ダブルホーム情報館」開始 ● 初次学生を対象としたダブルホーム導入授業「ソーシャル・スキルズ」を開講(2015年度に「ダブルホーム活動入門」へ変更)
2011年度	● 学生支援GP終了後、「地域の教育力をいかした」大学独自のプログラムとして、15ホームでダブルホーム活動を継続 ● 阿賀町、教育・学生支援機構と「ダブルホーム連携協定」を締結 ● Iホーム雁木デザインコンペで最優秀賞受賞(長岡市より)
2012年度	● 1ホーム(糸魚川市のVホーム)増え、16ホームで活動
2013年度	● ダブルホームに所属する学生が300人を突破 ● Iホーム雁木デザインコンペで最優秀賞受賞(長岡市より) ● KホームがAKARIBA2013あかりの展覧会特選受賞(加茂市青年会議所より) ● ダブルホーム専用Facebookを開設
2016年度	● 地域の思いに寄り添う「第2のふるさとづくり」としての活動方針を追加 ● ダブルホームへの参加を促す「ダブルホーム大説明会」を開催(以降、学生の企画・運営で毎年開催)
2017年度	● 1ホーム(新潟市西区坂井輪のLホーム)増え、17ホームで活動 ● 横つながりを強化する「大新歓」「ダブルホーム学生会議」を学生の企画・運営で開催 ダブルホームに所属する学生数374人、教職員数77人

います。また、学部と学年を越えた集団では、様々な個性と意見があり、互いを尊重する大切さを身をもって学ぶことができました」

ダブルホームでの体験を、「学生時代の『思い出』と語る高橋さんは、そこで感じた熱い思いを、地元新聞に寄稿したほどだ。

「自分たちが取り組むことで誰かに喜んでもらえる。これはとてもやりがいを感じさせてくれるものだと感じました。受け入れられていると実感すると、より一層この地域の話から相談されるという場面もありました。受け入れられていて、地域の方々から相談されるという気持ちが強くなるんです。ダブルホームの影響で、将来は人と関わる仕事がしたいと思うように



Uホーム阿賀町の里帰り市でのキャンドルワークショップ

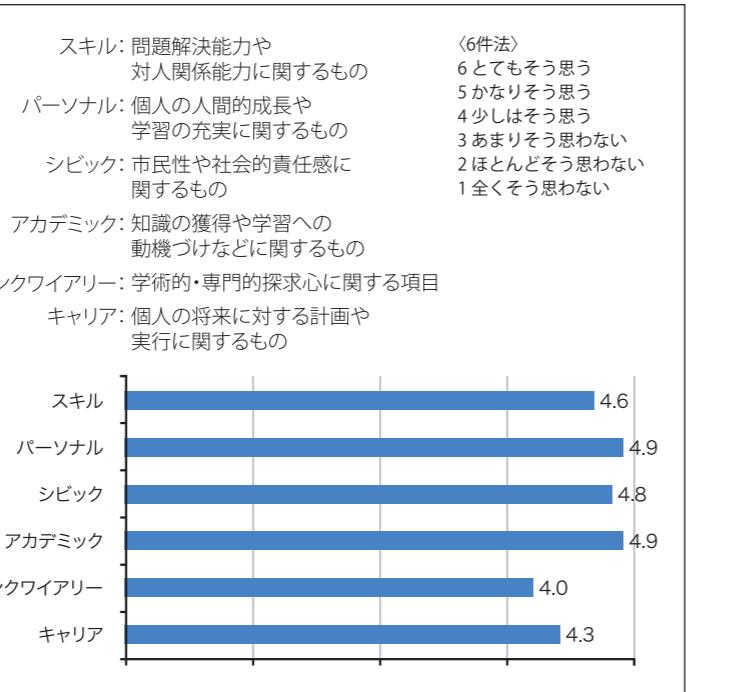


図3 ダブルホーム参加学生の学習成果 ※2016年度アンケート、活動が「少しは活動している」以上の96名を対象

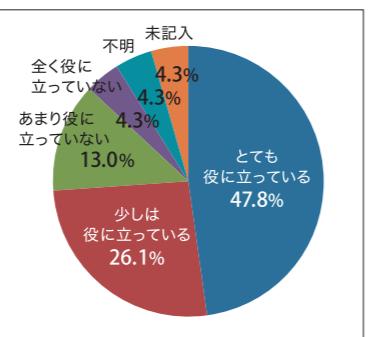


図4 卒業後のダブルホーム経験の役立ち度
※2014年度卒業生調査(シンポジウム参加者と郵送による回答者:23人)

なり、サービス業を目指しました。現在、私が勤務する会社では冠婚葬祭に関わる業務をしています。ダブルホームでの4年間がなければ、ダブルホーム経験の役立ち度をしている例は多い。図4は、卒業後のダブルホーム経験の役立ち度を今仕事をしていないと思います」

高橋さんのように、ダブルホームでの体験が卒業後の進路につながっている例は多い。図4は、卒業後のダブルホーム経験の役立ち度を表したグラフ。「役に立っている」と回答した人が大半を占めている。また、その理由として下記のようなコメントが挙げられた。

「仕事をチームでやらないと成り立たない。ダブルホームでの経験が人間関係の形成に役立っている」「地域の高齢の方や小学生と交流した経験が、幅広い年代の方々を相手にする接客にいきている」「後輩や先輩との関わり方。指示を待たず、自分から進んで行動する姿勢は今も保てていると思う」

学生支援センターの松井賢一教授は、「自分たちが何をやるか、何を生み出していけるのかを考えることが重要。やり方を含め、自ら新しいものをどんどん生み出していくという姿勢が、創造性や将来につながっていく」と説明している。

さらに図3では、ダブルホームでの活動を通して、自己の能力だけではなく、社会の一員としての自覚やキャリア形成意識の向上に影響を与えていたという結果が明らかになっている。幅広い興味や経験、目的を持つ学生が、思いを共有し、地域で学ぶことは、遊びへのモチベーションを高めるだけでなく、チームワーク力やリーダーシップの育成にも影響を与えていることが窺える。

現在のキャリアにつながっていると語る卒業生

では、実際にダブルホームを経験し社会で活躍するOB・OGは、

当時の経験をどのように感じてい

るのか。2013年3月の人文学

部卒業生であり、現在はライフイ

ベントのコーディネイトに関わる業

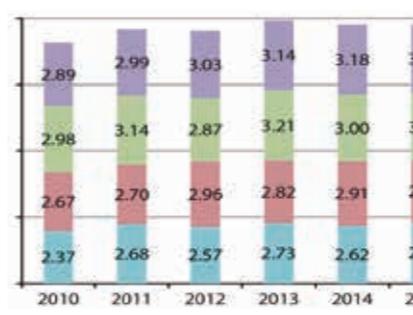


図2 ダブルホーム参加学生のダブルホーム参加による社会的スキル向上意識(学年別平均点)

図1は参加学生の推移。活動に取り組む学生は年々増加している。また図2は、参加学生を対象にした社会的スキルの向上意識調査の結果。こちらでは学年が上がるほど成長を実感するという傾向を読み取ることができる。

統いて、ダブルホーム制について集められた客観的なデータをもとに、その成果を見ていく。

成長を自覚した という学生の声

務に携わる高橋綾さんに聞いた。「私は1年次からダブルホームに参加しました。4年間、Gホームに所属し、阿賀町で活動していました。今も続いている里山アート展で作品を作ったり、地域のお祭りや小学校の行事に参加させていただきました」

来訪者としてイベントに参加

るのでなく、地域の中に入り、実際に催し物の内容や運営に関わった。阿賀町も他の市町村と同様、人口減少が進むエリア。交流人口を増やし、直接的に地域にぎわい創出につながる実践的な活動だ。

「地域のために何ができるのかを、地域の方と一緒に考え、計画

する。幅広い世代の方と触れ合い、思いを共有できただけで、とても自信になりました。座学で得た知識ではなく、社会の仕組みや現状

を肌で感じることができました」

さらに高橋さんは、学部・学年

を越えたGホームでの活動を通じ、チームワーク力が身に付いたと統

べて、「力を合わせてひとつのことを行なう力、課題を見つけ、それを解決に取り組む力が養われたと感じます」

「力を合わせてひとつのことを行なう力、課題を見つけ、それを解決に取り組む力が養われたと感じます」

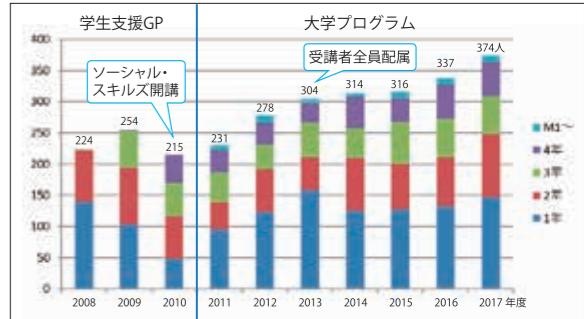


図1 ダブルホーム参加学生数の推移



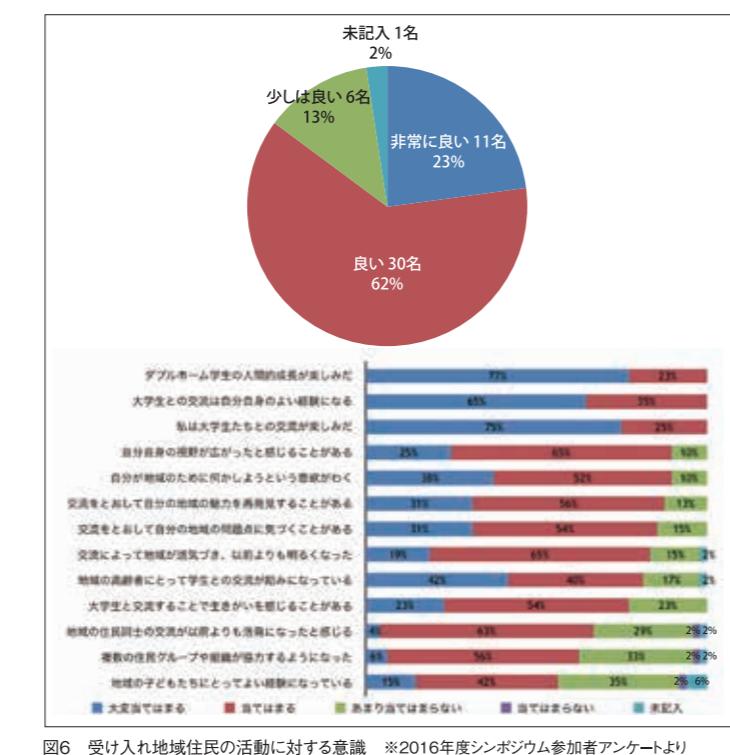
株式会社アークベル
高橋 綾さん(2013年3月卒)



ダブルホームシンポジウム

魅力ある社会を 築く力としての 発展を視野に

これまで関係者の証言やデータをもとに、ダブルホームの10年を振り返ってきた。学生たちは自分たちなりにできることを考え、それを探査し、意見交換などのやり取り返ってきた。学生たちは自分たちなりにできることを考え、それが「生懸命考え、行動したことが形になる。さらに卒業後の進路にまで影響を与えることによって」



受け入れ地域住民の活動に対する意識 ※2016年度シンポジウム参加者アンケートより

向き合って接するので、様々な学生がいるということを実感できます。この実感は100人に向けての講義にもいきています。OB・OGの先輩後輩関係を作ることでできたのも良かった。Sホームに卒業はない、ということを定着させていきたいです。OB・OGの参加を促すために教職員の継続的な担当は意味があると思っています。参加する教職員の負担は小さくありませんが、活動を自ら楽しみ、自分の成長にプラスになるという点で概ねバランスが取

れているように思います」
また、職員との関係性にも大きな発見があったと続ける。
「職員の方が学生の教育に関心と熱意があることを知れたことは、大学教員として大きな体験でした。学生の話をした時にお互いが同じように感じていたことがわかつて、感心しあったのが、今まで記憶に残っています」

では、「一方の大學生職員はどういう感じで、Tホームにて8年間、活動に関わる土田秀樹課長が話す。

「学生と直接的な関わりが少ない部署の職員にとって、ダブルホームの活動はとても貴重な時間。大学生は、学生にとって一番身近にいる社会の先輩だと思います。そのため自分が楽しく取り組んでいる姿を見せようと心がけています。Tホームでは米作りをしているのですが、実際に自身が楽しんでいるんです。教育機関で働く人間として、学生や地域のためになる活動をするのは、とてもやりがいのあること。職員も、学生や地域とつながる居場所があることで、存在意義や自己肯定感が得られるのではないかと考えています」

ダブルホームの活動自体が地域に対する大学の社会貢献。教職員にとっても学生や地域について考える意識を向上させている。

ダブルホーム制はどのような展望を持つているのか。松井教授の言葉をもって、本特集の結びとした。「私自身、この制度に取り組んでよかつたなど思っているところは、学生たちの人生に影響を及ぼせる部分があるということなんです。彼らが一生懸命考え、行動したことなどが形になる。さらに卒業後の進路にまで影響を与えることによって」

これまで関係者の証言やデータをもとに、ダブルホームの10年を振り返ってきた。学生たちは自分たちなりにできることを考え、それを探査し、意見交換などのやり取り返ってきた。学生たちは自分たちなりにできることを考え、それが「生懸命考え、行動したことが形になる。さらに卒業後の進路にまで影響を与えることによって」



株式会社 景 代表取締役
石山和史さん

魅力と方向性を 再認識できる 自らの地域の

成にも影響を与えてくれるでしょう。何より仲間と協働して汗をかき、達成感を感じることは人生の大きな喜びです」

マンパワーではなく アプローチに期待 学生の学問的な

統いて話を聞いたのは長岡市役所の職員、酒井俊明さん。柄尾支所勤務の平成24年度から現在に至るまで、柄尾をフィールドで活動するIホームをサポートしていくださうしている。

ダブルホームを受け入れている地域の方々は、この10年の歩みをどのように感じているのか。新潟市板山地区でDホームの受け入れをしている株式会社景の石山和史代表取締役はこう語る。

「地域にとって交流人口を増やし、にぎわいを創出することは非常に重要なわけですが、ダブルホームの学生たちは非常に大きな役割を担ってくれています。彼らが私たちと同じ視点で地域のことを考えてくれることで、自らの集落の魅力や今後の方向性を再認識できる。人口減少が進む農村の課題として、土地がある種の閉鎖性を持っていることは否定できません。ところが、私たちにとって子や孫のような世代との交流は、自然と心を開いて向き合えるあたかなものです。地域の小さな子どもたちにとってもお兄さんお姉さんとの交流は貴重なもの。そこで遊んだ思い出は心の形

であります。行政の立場からダブルホームの活動をどのように感じているのか。」
ダブルホームを運営する上で、自治体は学生と地域の橋渡し役。双方の相談に乗り、調整役を担つててくれている。行政の立場からダブルホームの活動をどのように感じているのか。

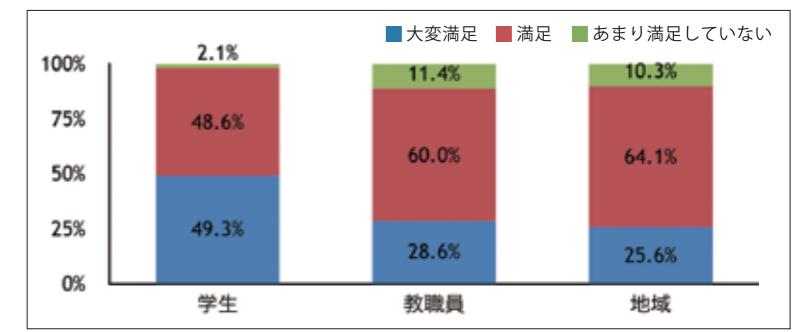
「回を重ねることにチームワークが練られていき、学生の成長を感じます。孫くらい年の離れた学生との交流は地域のお年寄りにとっても張り合いになっています。このようなプロジェクトで一番重要なのは目的を“見える化”することです。このようなプロジェクトで一番重要なのは目的を“見える化”することです。このように活動をどのように感じているのか。

長岡市役所 酒井俊明さん
(現在は中心市街地整備室勤務)



新潟大学 自然科学系総務課
土田秀樹 課長

かで自分のことを知っていく経験をしていますが、教職員にとっても関わる意義は大きい。教員は学生に知識を教えるだけでなく、人格的な面に触れるので緊張感があります。100人の学生を手にする教室とは違い、一人一人と



ダブルホームは 教職員にとつても やりがいがある

ダブルホーム制は、学生だけではなく、教員や職員も関わる。彼らの内面・実務面にほどのようない影響を及ぼしているのか。阿賀町担当、石川文洋准教授に聞いた。

「学生は、様々な人と接するな中ノ沢地区で活動するSホームの担当、石川文洋准教授に聞いた。「学生にはマンパワーとして関わるのではなく、あくまでもアカデミックな思考を持って、目に見える成果を出してもらいたい」という話をさせていただきました」

こと。学生にはマンパワーとして関わるのではなく、あくまでもアカデミックな思考を持って、目に見える成果を出してもらいたい」と。若い人たちが地域について真剣に考え、行動する姿を見るのは、行政組織の人間にとっても大変刺激になります。私たちは学生たち以上に熱く取り組まなければならぬと考えるようになります」

Enjoy! 学生ライフ

CAMPUS TOPICS

本学女子学生が新潟を飛び出し大活躍!



平成29年5月22日(月)～26日(金)に、シンガポール国立大学にて「17th AUN and 6th ASEAN+3 Educational Forum and Young Speakers' Contest」が開催され、本学から経済学部3年生の植松美香子さんら2名が参加しました。

AUN(ASEAN University Network)と ASEAN+3(ASEAN諸国と日中韓)の主要行事であるこのプログラムは、ASEAN+3を牽引するリーダーの育成を目的に、スピーチコンテスト、教育フォーラム(いわゆる「模擬国連」)等が4日間に渡る合宿形式で行われました。



また、世界の経済界や政界の女性リーダーが一堂に集う「世界女性サミット(Global Summit of Women)東京大会」(以下、GSW東京大会)が、5月11日(木)～13日(土)に開催され、経済学部3年の高井真由さんがヤングリーダー特別招待生として参加しました。GSW東京大会には、世界95カ国や国際機関から約1,400人の参加があり、世界経済における女性の地位向上や活躍推進を目的に、行政・民間企業・非営利組織の指導者らが3日に渡って議論を繰り広げました。



CIRCLE PICK UP!

表千家茶道部

慌ただしい学生生活から離れ 茶道の奥深さに思いを馳せる

「普段は週2回、大学会館の和室にて活動しています。今年は新入生が多く入部し、現在30人を超える大所帯となりました。新潟大学には4つの茶道部があり、流派ごとに作法が違います。私達は表千家です。スポーツのような競技と違い順位を決めるものではないので、それぞれがを目指す御免状の取得に向けて切磋琢磨しながら稽古に励んでいます。礼儀作法を学ぶことができますが、お花や炭、お道具への知識が必要です。好きじゃないと続けることが難しいですが、慌ただしい日常から離れ心を鎮めるひとときもあります」



各自が御免状の
取得に向けて
稽古に励んでいます

6月18日には本学4茶道部が合同で「開学記念茶会」を開催。緊張しながらも日々の稽古の成果を窺わせる手前を披露。学生や卒業生、一般の方で茶席は終始賑わっていた



部長 藤澤まりさん
(工学部3年)

にいがたハッピーライフ 東京・新宿 in

潟コン

Niigata Communication Network

2017年 10月28日 土

[受付] 14:30 [開宴] 15:30 [閉会] 18:30

ベルサール新宿セントラルパーク

参加費 お一人様 3,500円 (事前申込)
4,000円 (当日参加)

※申込多数の場合は先着順となります。[事前申込期限: 10月18日(水)]

新潟県出身の20~30代の男女 (定員500名)
新潟生まれ、新潟育ち、県内の学校出身など新潟に関わっている方、
新潟県への移住を考えておられる方も参加できます。

「にいがたハッピーライフ 東京・新宿 in」
「ラッキーなこと、いっぱい見つかります。」

参加条件

新潟大学の学生は、勉学のみならずサークル活動を始め様々な課外活動で活躍しています。このコーナーでは、そんな青春の1ページをお届けします!

担当教員(リテラシー学修主担当)

澤邊 潤 准教授

Jun Sawabe

Profile

博士(人間科学)。専門は教育工学・教育心理学



担当教員:佐藤 靖 教授、田中一裕 准教授、並川 努 准教授、堀籠 翔 准教授、
渡邊洋子 教授、熊野英和 教授、小路晋作 准教授、半藤逸樹 准教授

平成29年度より新潟大学に新設された創生学部。本学の豊富な学習資源を活用し、学生自らが自分の課題と目標を持つて学修する「到達目標創生型」の学位プログラムを提供している。本科目では、地域や産業界などでの体験的学修を通じ、地域や産業界などの学修目的や課題意識の発見を促す

平成29年度より新潟大学に新設された創生学部。本学の豊富な学習資源を活用し、学生自らが自分の課題と目標を持つて学修する「到達目標創生型」の学位プログラムを提供している。本科目では、地域や産業界など様々なフィールドでの体験的学修を通じて、日常の生活に密接に関連する産業・地域構造の理解を図る。学生の学修目的や課題意識の発見と、大学4年間の学修デザインへの気付きを深めることができます。リテラシー学修主担当の澤邊潤准教授に話を聞いた。

（学外学修）
フィールドスタディーズ

（学外学修）
フィールドスタディーズ

STUDENTS VOICE



右:島倉凌太さん(創生学部1年)
左:高橋千鶴さん(創生学部1年)

「学外に出で実際の社会の現場を体験することができる濃密な時間です。専門的な知識を学ぶ前の1年次だからこそ、身に付けられる視点を大切にしています」(島倉)
「自主的に動かなければ学べないという点は大変ですが、大きなやりがいがあります。自分の将来を自ら選ぶ力を手に入れられるように、高い意識で臨みます」(高橋)

取材当日は株式会社福田組の建築途中のマンションや土木工事の現場に立った学生たち。この科目を通じて、社会的な課題の現状理解と課題分析につながるもののが目的だ。また、この体

験的学修を通じて、日常の生活に密接に関連する産業・地域構造の理解を図る。学生の学修目的や課題意識の発見と、大学4年間の学修デザインへの気付きを深めることができます。リテラシー学修主担当の澤邊潤准教授に話を聞いた。

「学生には、事前リサーチを充分に行い、本気で学外学修の現実を変える気持ちで行くよう」と指導しています。同時に、協力機関の方々にも、ヴァーチャルな課題ではなく、本当に抱えている課題に触れさせてほしいとお願いしてあります。課題解決に限りなく接近するためのエビデンスを持つことが大切です」

「現代社会では単に知識があるだけでは活躍していません。知識を身に付けた上で、この場面ならこうしたらどうでしょう」という対話で、そのような人材の輩出に寄与することが創生部の目標です。そのため、経験を踏まえて、事前に設定した目標への到達度を常に把握してもらいたいと思います。社会の現状を分析的に理解し、自らの学びと行動がフィールドの活性化に繋がるよう、意識して学んでほしいと思います」



意欲ある学生が伸び伸びと勉学に勤しむ

授業紹介

—教育の現場—

専門的な知識や技術の修得と、均整の取れた知識の獲得は教育の重要な役割。約5,000科目の中から特色ある授業を紹介。

vol.20・創生学部



[イベント詳細および参加のお申し込み・お問い合わせは]

<https://www.facebook.com/niigata.network> | <http://gata-con.com/tyo>



にいがたハッピーライフ 東京・新宿 in

潟コン

Niigata Communication Network

ゲスト 横澤 夏子 (糸魚川市出身)

おばだのお兄さん (沼添市出身)

MC / 関田将人 番井奈歩

新潟の郷土料理が食べられる!
ふるさと新潟の仲間に会える!
新潟の地酒や地ビールが大集合!

■主催/新潟県 ■運営/潟コン実行委員会
■協力/(株)エフエムラジオ新潟、(株)JTB関東、新潟県酒造組合、公益財団法人 にいがた産業創造機構
■協賛/朝日酒造(株)、一正蒲鉾(株)、越後製葉(株)、(株)小崎屋總本店、三幸製葉(株)、ブルボン

新潟県



注目される研究報告

新潟大学では、伝統的な学問分野を継承するとともに、専門分野を超えて連携し合う研究や、先端的な研究など、真理探求や社会の発展に貢献する研究を行っています。



超域学術研究院（経済分野）
左近幸村 准教授

| Profile | 博士（学術）。膨大な一次史料と向き合い、グローバルな視点でロシア史を研究。

研究課題 ロシアから考えるグローバル・ヒストリー

船を通して見るロシア帝国の統合と拡張、近隣諸国との関係

左近幸村准教授の研究分野はロシア史、経済史。中でも、19世紀後半から20世紀初頭にかけてのロシアの海運発展を主に研究している。取り組むテーマは「船を通して見るロシア帝国の統合と拡張、近隣諸国との関係」。そのきっかけは意外にも紅茶であった。

「紅茶文化といえば英國が有名ですが、ロシアも19世紀末から中国をはじめ、現在のセイロンやコロンボあたりからお茶を大量に輸入していました。ロシアは英國の独占状態だった茶葉の輸入を自国で行うことを目指し、世界帝国を築いていた英國に対抗すべく船舶や海運を増強したのです」

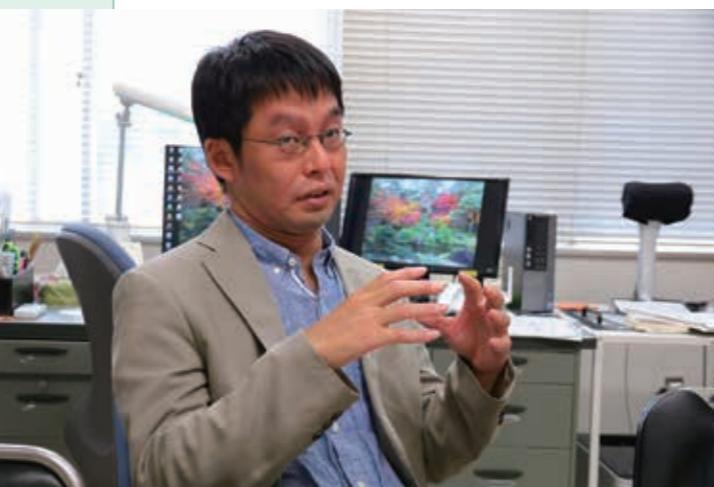
その船の活用方法に関するロシア政府内の議論も准教授の調査の対象だ。

「様々なロシア語の史料を読んだ結果、船はロシア帝国の統合や拡張の重要な道具だったと考えられます。ロシアの船は日本を含む多くの国々に寄港していて、その研究を進めることでこれまで知られていなかったロシアと諸外国の関係を明らかにできると考えています」

ロシア史へのアプローチとしてこのような研究は、世界的に見ても非常に少ない。現地の図書館や文書館を訪問すると、過去に開かれた形跡が見えない「歴史の一次史料」に直接触れることも多いという。つまり、左近准教授はこの分野の研究では先駆者の存在であり、独自の視点を持っているということだ。

このような点が評価され、准教授の研究は、優秀な若手研究者が自立して活用できる環境整備と人材育成を目的とする「テニュアトラック普及・定着事業」にも認定された。

「ロシアの歴史や制度をグローバル化の中で見ていくと、社会主義が始まる以前から独自の経済のルールがあったことが分かります。それらは船舶や海運に力を入れていく過程で次第に変容していったのではないかと考えています。その仕組みを明らかにし、ロシア史の大きな流れを解明することを目指しています」



入学準備は、生協の新入生サポートセンターへ 大学生活のスタートを先輩学生がサポート



住まいから教科書・教材まで
まずは、資料請求を
新潟大学生協 新入生応援サイト [検索]



新潟大学生活協同組合 TEL 025-262-7411 / FAX 025-262-6205

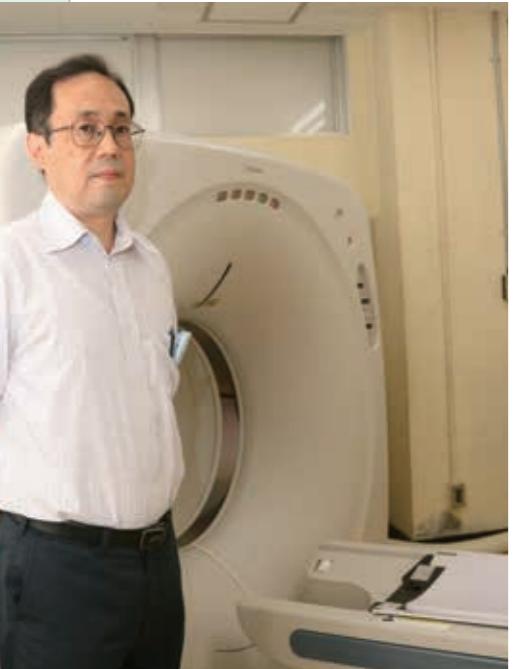
医歯学系（医学部 保健学科 放射線技術科学）
齋藤正敏 教授

| Profile | 博士（理学）。専門は医用物理学。CTを中心としたX線イメージング技術に関する基礎研究を進める。

研究課題

がん放射線治療計画のためのデュアルエナジーCT

正確かつシンプルな電子密度測定法の発見 X線から粒子線治療へと展開



放射線治療は、手術、薬物療法と並ぶ「がんの3大療法」のひとつ。近年、IGRT（画像誘導放射線治療）に代表されるビーム照射技術の高度化は目覚しく、また、がん病巣部に最適な線量を投与する治療計画のための計算法も飛躍的な進歩を遂げている。

一方で、その線量計算の礎となる人体データ「電子密度」の測定法は30年以上前から基本的に変わらず、患者のCT画像の画素値（CT値）から電子密度を推定している。

「我々の最新の研究成果をまとめた論文が『Medical Physics』（医学物理分野

ではトップレベルの国際誌）に近く掲載されます」

この齋藤教授らの論文に査読者から寄せられたコメントが下記である。

“The method presented by the authors is arguably the most elegant in the literature”

「つまり“最も単純なものが最良である”ということ。このメッセージを常に意識して私たちは研究に取り組んでいます」

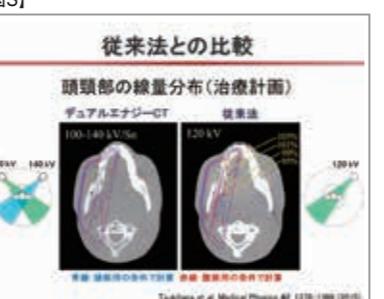
[図1]



[図2]



[図3]



▲従来法との性能比較。デュアルエナジーCTでは条件が変わっても線量分布が安定・正確に得られる

企業の技術向上を目指す産学官交流ネットワーク 新潟大学産学連携協力会

新潟大学地域創生推進機構と産業界等が密接に連携し、
産業の活性化、高度化、地域社会の発展を目的に
技術の向上及び地域連携を図ります。

詳細をお知りになりたい方、加入ご希望の方は、ホームページをご覧ください。[新潟大学産学連携協力会](http://www.irep.niigata-u.ac.jp/kyouryokukai/)

お問い合わせ先

新潟大学産学連携協力会（新潟大学地域創生推進機構内）TEL 025-262-7553 FAX 025-262-7577 Email unico@cer.niigata-u.ac.jp



①新潟市内の中学校で行ったファンリーテーション授業
②平成29年6月17日に実施した「みらいすきッ!
たちに必要な学びについて」探究した
③中高生向けキャリア教育マガジン「みらいすBOOK」
は、新潟県異業種交流センター主催の地域活性化大
賞の大賞を受賞



子どもと社会をつなぐキャリア教育を支援

活躍する卒業生紹介

”学びの先“

新潟大学で”真の強さ”を学び、
社会で活躍する卒業生をご紹介します。

NPO法人みらいすworks
代表理事
小見まいこさん
Profile.
1982年新潟県新潟市
生まれ。2004年新潟大学
教育人間科学部卒業。
2012年「みらいす
works」を設立した。

「大人の本気が 子どもの 未来につながる」

在学中から現在に至るまで、「学びをつくる場所」にいる。その始まりは1年次。公民館で子どもたちの放課後の居場所づくりをする「まなび屋」事業を仲間と共に設立した。

「まなびすれば地域と一緒に子どもたちに豊かな学びの場を提供できるのか。試行錯誤し、出会ったのが、まちづくりの手法としてのワークショップとファンリテーションでした。こんなやり方があるのかと

感動し、以降、まちづくりの現場を経験させてもらいました」

講義室の外での学びが、小見さんの現在につながっている。そこで得たものは何だったのだろうか。「何のために学ぶのかと大学で学んでいることの意味や価値に気付けたし、その先にあるものが見えた。また、学びには学校

法人化までの4年間で、473件、のべ25,802名の子どもと大人にプログラムを提供した。子ども

Information

(みらいすworks)
新潟県新潟市西区坂井砂山2-18-2
TEL&FAX:025-211-8383
http://miraisworks.com
@miraisworks
高校生・大学生向けの情報を発信中

卒業生と母校との絆、ポケットに「新潟大学カード」入会受付中!

新潟大学全学同窓会では、新潟大学の発展を支援し、学部間の枠を超えた同窓会員へのサービスと連携を深める目的で、三菱UFJニコスと提携してクレジット機能付きVISA国際カード「新潟大学カード」を発行しています。

新潟大学カードに関するお問い合わせ先

新潟大学全学同窓会事務局
電話:025-262-7891
(受付時間 平日10:00~15:00)
E-mail:n-doso@adm.niigata-u.ac.jp



恩師: 小澤英浩 名誉教授 元・新潟大学歯学部教授 教え子: 網塚憲生さん 石田陽子さん

小澤 私は、研究者であり教育者でもあったわけですが、新潟大学で過ごした34年間は非常に貴重な、自分の人生の中でも一番大切な期間だったように思えるんです。そして、どちらかと言うと教授が世に出て活躍してくれていることはすごく嬉しい思います。

ただ、それはとてもラッキーなこと。たまたま優秀な人たちが集まってくれたおかげです(笑)。

網塚 (笑)いや、ラッキーなのは先生と出会えた我々の方です。僕らは骨や石灰化した組織の研究をしています。先生のもとで学んだ20~30年前と比べ、機械のレベルはすごく上がっているはずですが、未だに小澤先生が撮った以上のクオリティを持つ電子顕微鏡写真は出できません。これはやはり小澤先生の感性と電子顕微鏡に対する洞察の鋭さが理由だと思います。先生が座右の銘のようにおっしゃっている、イギリスの詩人、ジョン・キーツの詩、「Beauty is truth, truth beauty 真実とは美しいものである」という詩をいつも思い出します。「電子顕微鏡等を介して、体の中の真実を見出すのが僕らの仕事だ」という、小澤先生の考え方を感じ受けた若者が新潟大学にたくさんいたということですから。

石田 私もそんな小澤先生の大

小澤 当時は歯学部長室にほどんどいなかつたんですけど、いまました。そして「実験や研究に興味がある人は、研究室にいつでもいらっしゃい」と、言つてくださいました。

石田 私もそんな小澤先生の大

シリーズ vol. 20 恩師と語らう

師弟で懐かしむ当時の新潟大学



小澤 褒められてばかりで、穴があいたら入りたいですね(笑)。当時、新潟大学は、電子顕微鏡のメツカでもあったので多くの研究者が集まつたのもかもしれません。私はざつくばらん性格ですから、学生と同じ目線で付き合ふことを心がけていたのも良かったのかかもしれません。「教える」というより「語りかける」という行為を大切にしてきたつもりではいるんですよ。

網塚 それが小澤先生らしさです。先生とお会いして僕は人生が変わったし。その意味では第二の父親だと思っています。

小澤 うれしい言葉ですね(笑)。今、「第二の父親」と言われたけど、東京生まれの僕にとって新潟は第二の故郷なんです。それくらいこの土地、この大学が大好きです。自分の人生において、お二人はもちろん、本当に良い仲間と出会えたことが嬉しいんです。感謝という言葉に尽きますね。



おぢわひでひろ
小澤英浩 名誉教授

博士(医学)。昭和10年・東京都生まれ。昭和35年東京医科歯科大学歯学部卒業。昭和36年、新潟大学医学部に赴任。その後、歯学部新設に伴い昭和42年から平成13年まで34年間在籍。歯学部長などを歴任する。電子顕微鏡による歯や骨など硬組織等に関する研究が国際的に評価されると共に、門下生から数多くの教授を輩出。教育者としても高い評価を得る。平成27年4月に叙勲(瑞宝中綬章)。



あみづかのりお
網塚憲生さん
北海道大学 教授

博士(歯学)。平成4年3月、新潟大学大学院歯学研究科修了。小澤名誉教授の門下生であり、現在は北海道大学教授。骨代謝における細胞組織学的研究分野で世界的に活躍する研究者である。



いしだようこ
石田陽子さん
新潟大学 特任助教

博士(歯学)。平成12年3月、新潟大学大学院歯学研究科卒業。平成16年3月に大学院歯学研究科博士課程修了。平成23年より新潟大学医歯学総合研究科の特任助教として勤務。

Campus Information

地域に密着しながら様々な活動を続ける新潟大学。皆さんにお伝えしたいニュースはたくさんあります。

「日本酒学」の構築を目指して新潟県、新潟県酒造組合と連携協定を締結しました



醸造試験場を所管する新潟県及び新潟県酒造組合と、平成29年5月9日(火)、日本酒に係る文化的・科学的な幅広い分野を網羅する学問分野「日本酒学」の構築について、国際的な拠点の形成とその発展に寄与すること目的として、連携協定を締結しました。

これまで三者は、経済学部や農学部との共同研究や、講義への講師協力など、継続的な連携・協力をやってきましたが、三者の関係をより発展させるため、このたびの締結となりました。

協定では、日本酒に係る文化的・科学的要素を融合した学問分野「日本酒学」の構築を目指し、本学の教育・研究活動の成果を広く社会に還元することにより、新潟県の産業振興と新潟県を代表する地域ブランド品である新潟清酒の魅力向上に貢献することを目指すこととしています。

締結式において、高橋学長は「総合大学としての教育研究成果を十分に發揮し、地域社会の発展に貢献したい」、新潟県の米山知事は「産官学が連携した学術拠点の形成によって新潟県の産業が発展することを期待したい」、新潟県酒造組合の大平会長は「日本酒についての教育や研究を通じて、新潟の魅力を世界に向けて発信したい」と、それぞれ今後に向けた期待を述べました。

「平成29年度大学の世界展開力強化事業 第1回GLocal Age 2020シンポジウム」を開催しました



平成27年度採択文部科学省「大学の世界展開力強化事業(トルコ)」に基づき、5月18日(木)に「第1回 GLocal Age 2020シンポジウム」を開催しました。

本事業は、本学(農学部、大学院自然科学研究科、災害・復興科学研究所)、福島大学、並びにトルコのアンカラ大学、エーゲ大学、中東工科大学が連携し、両国の農業及び防災の課題をしなやかに解決する能力「レジリエンス」を持つ人材養成を目的とするものです。

シンポジウムには、教職員・学生、学外参加者を含め約70名が参加し、事業の紹介のあと、トルコ人特任助教によるトルコの国、歴史、地形、農業、最新の安全情報や生活情報について説明が行われた後、アンカラ大学大学院生による本学における研究内容について流暢な日本語での発表がありました。

続いて派遣プログラムに参加した日本人学生による体験談が英語で語られ、プログラムを通して学んだことや今後の課題について発表されました。発表では、トルコ人学生受け入れに関する報告もあり、トルコ人学生が新潟の農業、防災・復興技術に大変興味を示していることなども報告されました。

亀田製菓株式会社と連携協定を締結しました

亀田製菓株式会社と、包括的な産学連携を推進し相互の発展と地域社会への貢献を図ることを目的として、平成29年5月29日(月)に連携協定を締結しました。

同社とは、これまで医歯学系分野の寄附講座「病態栄養学講座」での教育研究活動や、農学系分野で複数の共同研究に取り組むなど、継続的な連携・協力をやってきました。

この協定のもと、共同研究の実施体制等を整備することで技術開発や事業化を加速させ、学術研究の振興や人材育成につなげていくことにより、地域に根差した総合大学としての幅広い知見を活用した様々な取り組みを行い、地域社会の発展に寄与することを目指します。

亀田製菓株式会社の佐藤代表取締役社長 COOは「総合大学である新潟大学との連携によって、これまで以上に幅広い分野で事業化に取り組み、新潟県内で事業を興すことで地域の振興に寄与したい」と述べられました。

